

令和元年度 武雄市立武内小学校 学校評価結果表

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
『学校大すき・友だち大すき・ふるさと大すき武内っ子』	①花まるタイムの工夫改善と定着 ②ICT教育(スマイル学習)の定着 ③新学習指導要領への対応 ④体育行事(旬間含む)の充実 ⑤学校生活での規律・規範意識の向上 ⑥家庭での基本的な生活習慣の徹底 ⑦青空教室(異学年活動)の充実 ⑧いじめ対応、人権教育の充実 ⑨特別支援教育の充実 ⑩開かれた学校づくり

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

達成度

- A:ほぼ達成できた
B:おおむね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

3 目標・評価

①確かな学力:主体的に学ぶ子どもの育成							学校関係者評価委員会から		
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(達成度の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	●志を高める教育	①花まるタイムの指導方法の改善・定着	・学習規律意識、学びに向かう姿勢の向上を図るとともに、学年の発達段階やカリキュラムに応じた花まるタイムの指導方法の改善・定着を行う。	・年2回の学習のきまりチェックを行ったり、武内小スタンダード(授業準備、話の聞き方、返事の徹底)の定着を図ったりすることで、学習規律意識の向上を図る。 ・各学期末の花まるアンケートを取り、指導方法の再検討を行う。 ・学校評価の児童アンケートにおいて、花まるタイムで「よくできた」「だいたいよくできる」と答える児童90%以上を目指す。	B	・学習の決まりチェックを各学期の初めに行ったことで、学習用具の準備や学習の心構えなどの意識付けにつながった。 ・授業準備、話の聞き方など向上が見られたが、返事について徹底までは至っていない。 ・花まるタイムでは、担任が他のクラスでの指導を観ることで、声掛けやテンポの改善につながった。 ・花まるタイムで、大きな声、集中、協力などが「できていない」「だいたいできていない」と答えた児童が約89%だった。	・声を出して返事することやうなずくなど態度で反応を示すことの効果や影響について児童に話すことで、返事や反応することの意義を理解させる。 ・担任が自分以外のクラスで指導することで、教師、児童の声、集中、協力の意識をさらに高めていく。	A	・花まるタイムについては改善を図り、武内小ならではの内容や方法に変えていく。
	●学力の向上	②ICT教育の定着	・授業におけるICTの効果的な利活用を明らかにするために、様々な教材での活用方法を共有することにより、ICT利活用を通して協働的に問題を解決させ、教育の質を向上させる。	・ICT利活用能力を高めるために、ICT職員研修及びICTスキルタイムを年3回ずつ行う。 ・ICT活用強化週間を設定し、様々な教材におけるICT利活用を促す。 ・ICTの効果的な利活用に関して、教職員間で情報共有を行う。	A	・ICT職員研修を実施し、ICTスキルタイムを年に3回行うことができた。ICTスキルタイムでは「プロゼミ」を活用した授業や「フローチャート」を用いた授業を実施し、児童と教職員のICTスキル向上につながった。しかし、該当学年の内容のみしか先生方に伝えることができなかったため、学年に関わらずに情報を共有する機会を作るべきであった。 ・ICT活用強化週間を設定し、ICT利活用について促すことができた。 ・校内研究に関する部分では、職員間でICTの効果的な利活用について情報共有ができた。しかし、普段の授業でどのようにICTを活用しているのかを情報共有する機会が不十分だった。	・ICTスキルタイムでの取り組み(プロゼミやフローチャートなど)を、該当学年の教員だけでなく、職員全体で共有できるように職員研修を行う。 ・ICT活用強化週間でも各クラスが取り組んだことを職員間で共有する時間を作り、ICT利活用に関する教員のスキルを高めていく。	B	・タブレットを予習だけでなく、家庭でも復習ができるように活用していることは良い取組である。
	○指導方法の開発・改善	③新学習指導要領への対応(道徳科と外国語活動)	・新学習指導要領に対応した道徳計画と本校独自の花まる英語をカリキュラムに位置づけ、外国語活動の年間計画を立て、指導方法改善定着を図る。	・ふれあい道徳で、新学習指導要領に基づいた道徳科の授業を全学年で行い、保護者への周知を図ったり、アンケートへの協力をお願いしたりする。 ・職員研修で外国語活動および外国語科の指導の在り方についての研修を行い、スムーズに移行できるように随時改善していく。	B	・児童のアンケートでは、道徳で学習したことを普段の生活に生かすことが「できていない」「だいたいできている」と答えた児童が約89%だった。 ・ふれあい道徳では、校内に保護者アンケートを呼びかけるスペースを作り、協力をお願いすることが思うように集まらなかった。 ・掲示物やカード、ゲームなどを授業の中に取り入れ、児童が意欲をもって活動できる授業を行うことができた。該当学年以外にも広げていく必要がある。	・学校便りの一部に、道徳科での取り組みを掲載し保護者への周知を図る。 ・ALTとの授業の打ち合わせの時間を確保し、指導方法改善を図る。 ・各学年で作成した掲示物やカードなどを保管し、授業準備や指導方法改善に生かせるようにする。	A	・新学習指導要領の本格実施に向けて取り組んでいる様子が充分理解できた。

②健康な体:たくましい体づくりに励む子どもの育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(達成度の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	●健康・体づくり	④体育・保健行事(旬間含む)の充実	・健康な体をつくるために、体育的活動と運動旬間等を関係づけて実施し、進んで外で運動することができた90%の児童が答えることができるようにする。	・健康な体づくりのために、なわとび・マラソン旬間などを年間で見直しで実施する。 ・マラソン旬間では、走る距離を伸ばすような取り組み(学年対抗距離チャレンジや個人の距離表彰など)を提案していく。 ・昨年度の運動委員会の活動として提案されたスポーツサーキットなどの児童発達の企画を推奨し、外で運動する機会を設定する。	B	・健康な体づくりのために、なわとび大会やマラソン旬間を計画し、実施することができた。 ・マラソン旬間では、個人差が多かったが、カードを励みに頑張って走っている児童が多かった。 ・本年度も運動委員会の活動で、スポーツサーキットが提案され、体育館内ではあるが、各学年ごとに、楽しんで参加することができ、参加率も高く、効果的な提案ができた。 ・進んで外で運動することができたと言った児童が90%に満たなかった。	・健康な体づくりのために、なわとび・マラソン旬間などを年間で見直しで実施する。 ・マラソン旬間では、走る距離を伸ばすような取り組み(学年対抗距離チャレンジや個人の距離表彰など)を提案していく。 ・運動委員会の活動として提案されたスポーツサーキットなどの児童発達の企画を推奨し、外で運動する機会を設定する。 ・校内に遊びに行かず、室内で遊んでいる児童へ通した遊び場所の指導を徹底していく。	A	・県のスポーツチャレンジへの挑戦など新たな取組を期待する。
		・病気の予防と怪我の防止を徹底させる。心身ともに健康な体作りのために保健指導を充実させる。	・担任と養護教諭が学期に1回、TTで保健指導を行う。 ・健康委員会の活動として、手洗いうがいがいっしょに呼びかけを行う。 ・集団下校時には、月に一度(第一週)保健のあてに「関連した内容について保健指導を行う。また、けがに対する意識を高めるため、前月のけがの種類や数などの状況を児童に知らせ、注意を促す。	A	・各学年ごとに年一回の担任と養護教諭による保健指導を行った。また、性指導やブラッシング指導など、必要な保健指導を適宜行うことができた。 ・健康委員会の活動として、手洗いうがいがいっしょに「意図づけ」の呼びかけを行うことができた。 ・昨年度よりけがの数が減っていることから、月に一度の集団下校時の保健の話が効果があったといえる。	・担任と養護教諭が年に1回、TTで保健指導を行い、学年や時期にあった保健指導を適宜行う。 ・健康委員会の活動として、手洗いうがいがいっしょに意図づけの呼びかけを行う。 ・集団下校時には、月に一度(第一週)保健のあてに「関連した内容について保健指導を行う。また、けがに対する意識を高めるため、前月のけがの種類や数などの状況を児童に知らせ、注意を促す。	A	・病気の予防に向け、マスク着用・うがい・手洗い・換気等全員が意識して取り組んでほしい。	
	○学校・家庭での基本的な生活習慣の定着	⑤学校生活での規律・規範意識の向上	・元気な挨拶や礼儀正しい言葉づかい、正しい廊下歩行などの規律・規範意識の向上を。学校生活5か条を守ることができた90%の児童が答えることができるようにする。	・学校生活5か条の指導を全校朝会や集団下校時に言い、定着を図る。 ・元気な挨拶や礼儀正しい言葉づかい、正しい廊下歩行などの振り返りを月に一回行う。 ・学期に一回、学校生活5か条全体の振り返りを行い、守れていない部分の指導に活かす。	B	・学校生活5か条は、85%の児童が守ることができていると感じている。しかし、挨拶の習慣化や正しい廊下歩行などの意識の高まりは喜ばない。 ・学校生活5か条の指導は全校朝会や集団下校時、学期ごとの振り返りなどで行っているが、意識の定着までには至っていない。	・継続して、学校生活5か条の指導を全校朝会や集団下校時に言い、定着を図る。 ・元気な挨拶や礼儀正しい言葉づかい、正しい廊下歩行などの振り返りを月に一回行い、守らなかったものについて、集団下校時、または全校朝会の生活の話や今週のがんばりポイントとして知らせ、玄関に掲示して意識付けをする。 ・学期に一回、学校生活5か条全体の振り返りを行い、守れていない部分を具体的に取上げて、指導に活かす。 ・挨拶・廊下歩行については、教職員全員が一貫した態度で毅然とした指導を行うことを徹底する。	B	・挨拶が非常に良くなったし、朝のハイタッチは、自分から手を出すようになった事は嬉しい。
		⑥家庭での基本的な生活習慣の徹底	・早寝早起き朝ごはんや家庭での手伝いなどの習慣を身に付けさせ、家庭生活3か条を守ることができた85%の児童が答えることができるようにする。 ・長期休業前には、「よいこのくらし」を配付して、家庭生活についても周知し連携を図る。 ・保護者向けの生活習慣と健康や学習への影響に関する啓蒙のお便りを発行する。	・家族の憩想園に家庭生活3か条のチェック欄を設け、保護者と児童と一緒に振り返ることができるようにする。 ・ノーテレビノーゲームの振り返りを各学期で行い、児童の意識を高める。 ・長期休業前には、「よいこのくらし」を配付して、家庭生活についても周知し連携を図る。 ・保護者向けの生活習慣と健康や学習への影響に関する啓蒙のお便りを発行する。	A	・年度初めに、保護者へ向け、睡眠とゲームとの関係や脳への影響に関する資料をお便りで配付したが、ゲームやYouTubeなどの電子機器に依存するような兆候の児童の増加を受け、保護者向けの全体的な指導があり、改善を促した。 ・家庭生活3か条が守ることができた88%の児童が答えることができた。	・家族の憩想園に家庭生活3か条のチェック欄を設け、保護者と児童と一緒に振り返ることができるようにする。 ・ノーテレビノーゲームの振り返りを各学期で行い、児童の意識を高める。 ・長期休業前には、「よいこのくらし」を配付して、家庭生活についても周知し連携を図る。 ・保護者向けの生活習慣と健康や学習への影響に関する啓蒙のお便りを発行する。	B	・「早く帰ってゲームをしたい」という言葉が以前より少なくなった。 ・ゲーム依存に対する未然防止の対策を行ってほしい。

③美しい心:人の痛みが分かる子どもの育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(達成度の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	●心の育成	⑦青空教室(異学年活動)の充実	・異学年集団による縦割り班活動を実施させ、最後の振り返りで9割以上の児童が互いに協力して活動することができたと答えることができるようにする。	・異学年での「青空教室」を民間学習塾と協働してプログラムを考え、5月以降、年に5回実施し、教科学習と関連づける。毎回の「青空教室」の終わりに、よく関わっていた児童を紹介し、褒める。 ・集まる活動でも異学年交流を取り入れ、異学年での「わんぱくく」を3回、「クリタイム」を6回実施したりして、全教育活動に広げ、参加率を高めるようにする。 ・縦割り班活動の振り返り期間には、児童相互の認め合いの場を設定し、具体的に賞賛できるように、視点を提示する。	A	・「青空教室」の最後の振り返りで9割以上の児童が協力して活動することができた。また、心ばかりの集まりや平和会など、異学年で協力したり教えたったりする機会を設けることができた。 ・「クリタイム」の振り返りは児童が集中して取り組むことができた。6年生のみの振り返りになっていた。時間をきちんと設定できていないのが課題。 ・青空教室の終わりに児童相互の賞賛ができた。担当の先生方に振り返りのやり方の周知徹底ができていなかったことが課題。	・「クリタイム」の振り返りで、児童相互の認め合いができるように「今日のMVP」を決めるようにする。 ・「クリタイム」開始の時刻を5分早めて、終了の合図を5分早くし、落ち着いた状態で振り返りができるようにする。 ・担当の先生方に、青空教室やクリタイムなど、特設タイムの目的や、振り返りの方法などを確認する時間を設ける。	A	・縦割りで年齢が違っている中で、優しくアドバイスをしている上級生の姿を見ると、温かい気持ちになる。 ・自分たちが使用した場所は掃除をする。大切に使うなど放課後児童クラブでも行っている。
	●いじめの問題への対応	⑧いじめ対応、人権教育の充実	・教育相談連絡会を開催し、いじめ等の早期発見に努め、生活アンケートで「学校生活は楽しい」「学校が好き」と100%の児童が答えることができるようにする。	・毎週教育相談連絡会を開催し、いじめ等の早期発見に努め、学校全体で対応する。 ・毎月最終週はアンケート週間とし、児童には月1回、保護者には年に2回アンケートを実施し、いじめ等の早期発見に努め、個人面談等を取り入れ、素早く対応する。 ・教育相談旬間の後に、各学級の相談内容とその対応について共通理解をする場を設ける。	B	・学校評価アンケートで「学校生活は楽しい」と100%の児童が答えることは出来なかった。92%の児童は達成できた。 ・月1回のアンケートを実施し、気になる回答の児童へ各担任の先生が対応した。 ・教育相談旬間の後に、各学級の様子について共通理解する場を設けることができた。	・アンケートの週は各担任への周知徹底を図るため、アンケート実施を週案に載せてもらう。 ・今後も教育相談旬間後の共通理解の場を設け、全職員で対応、支援ができるようにする。	A	・いじめの未然防止については、特に心遣いをいたさうお願いする。 ・家庭で培うべき道徳意識を学校だけに任せているような気がする。 ・児童の表情を見ると今のところ心配になる子は少ない。
	○個に応じた教育	⑨特別支援教育の充実	・特別支援を含む、個に応じた細やかな指導を行う。 ・児童や保護者の特別支援学級への理解を深める。	・個別の支援計画を作り、年に3回教職員の個別支援に関する研修を実施する。そして、担任だけでなく、それぞれ立場(校長・教頭・教員・教員・特別支援コーディネーター・教育相談担当・スクールカウンセラー・生活支援員)をいかに全職員で児童の教育に当たる。 ・ひまわり学級について、児童には全校朝会などで6月と9月の年間2回の紹介を行い、理解を深めるようにする。保護者には、4月と10月と2月に特別支援教育便りを行い、支援体制を知らせたり、児童や保護者の振り返りに沿った情報を提供したりして、特別支援教育についての啓蒙を行う。 ・教育相談連絡会の中で、外部機関(言葉の教室、学びの教室、スクールカウンセラー、巡回相談など)との連携の必要性について考える場を設ける。	B	・SOへつなげたい児童の把握が難しく感じた。児童で誰か話したい人がいるが、担任の先生はつなげたい子がいるが、教育相談担当の先生にその情報が入りにくくなっている。 ・ひまわり学級についての紹介を授業に年2回行えるよう、年度初めに計画しておく。(4月のわんぱくく紹介の前半を活用し、全校に教室の使い方やメンバーなどを紹介する。8月の休業集会の時に運動会の過ごし方などを紹介する。など)	・生活アンケートに「担任の先生以外と話したいです」という項目を設けたり、教育相談の担任が口頭で尋ねたりする。 ・ひまわり学級についての紹介を授業に年2回行えるよう、年度初めに計画しておく。(4月のわんぱくく紹介の前半を活用し、全校に教室の使い方やメンバーなどを紹介する。8月の休業集会の時に運動会の過ごし方などを紹介する。など)	B	・今後は、様々な困り感をもつ児童に対応するため特別支援学級がこれから増えていくと思う。 ・支援が必要な児童に対する差別意識が生まれないように全体で見守る雰囲気を作り上げてほしい。

④開かれた学校づくり

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(達成度の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	⑩業務の効率化及び分散化	・会議や事務の効率を図り、行事等の精選や分散を行うことで、教職員が児童と向き合う時間を昨年度より増やす。	・会議は45分以内と設定し、それを実行できるように討議する内容は赤字で明記できるようにし、会議の効率化を図る。 ・定時退勤日を毎週金曜日に設定したり、働き方改革の合言葉を提示したりして職員の業務効率化の意識を高める。	B	・会議は45分以内という目標を全員が意識し、会議時間の短縮に努めることができた。しかし、2か月の内容を討議するには時間が足りないこともあり、今後の課題である。 ・年度初めに定時退勤日を金曜日に設定していたが、全員がそろえるのが難しくなってきた。途中より、週1回は必ず定時退勤するように声掛けを行ったことと実行に移す職員が増えた。 ・平日半日デーを設定し、学級事務の時間を確保したことで、教職員の8割以上が昨年度より働き方が進んだと答えている。	・職員会議前に各部の提案時間を配分し、その時間内に提案や協議が終わるように全職員共通理解をし、会議に臨むようにする。 ・低学年の週時数を1時間減らし、担任が高学年の授業に週1時間出るなどして、仕事の平準化を考えた策を講じる。	A	・子どもにとって、先生の元気な姿は、一日のやる気につながるもので、ぜひ、先生の働き方改革に徹底して取り組んでほしい。
	○開かれた学校づくり	⑪開かれた学校づくり	・学校運営協議会や地域学校協働本部連絡会を年3回開催し、それぞれの意見や評価をもとに、地域や青年会、学校が協働することで、双方向の連携を行う。	・学校長の経営方針や方策、教育カリキュラムに基づいた、地域学校協働人材バンクを活用した取り組みを学校だけでなくホームページ等で紹介し、保護者や町民に知らせる。 ・児童が地域の一人としての意識を高めるために町行事の一端を担う機会(例:町民運動会参加のよびかけなど)を設けるようにする。	A	・花まるタイムをはじめ、教育カリキュラムに、地域学校協働本部の方の力を借り、充実した活動を行うことができた。 ・地域の一人として、地域の行事例えば、日の出の入りマラソンでは、全校児童全員で応援の横断幕を作ったり、オフークで開催のお知らせ等を行い地域に貢献することができた。	・教職員の働き方改革を進めるためには、地域の方や保護者の方など外部の方への理解の促進等が必要である。そこで、学校運営協議会や地域学校協働本部連絡会の協議事項にあげ、いろいろな意見を出してもらいながら、教職員の働き方改革を営業していく。	A	・学校支援ボランティアに参加された長寿会の皆さんは、子どもたちのおもてなしにとっても喜ばれていた。子どもたちから元気をもらっている。

4 本年度のまとめ・次年度への取組
(1)本年度のまとめ 児童の発達段階に応じたきめ細かな指導や支援によって、どの項目も概ね良好な達成状況である。特に、ICT教育の定着、健康な体づくりの保健指導、家庭での基本的な生活習慣の徹底、異学年交流の充実、開かれた学校づくりなど、教職員の改善意欲や保護者・地域の方の協力による成果だと考えられる。「特別支援教育の充実」や「業務の効率化及び分散化」等の項目に課題が残った。担当者任せではなく、全教職員がアンテナを高くし、日々実践していくことが必要である。
(2)次年度への取り組み ・学力向上においては、校内研究での全員授業、官民一体型学校公開などでICT利活用教育にこれまで力を入れてきたことで、児童や教職員のICTスキルは向上した。一人一人の学力向上については、これからも取り組む必要がある。そこで来年度は、「学習規律意識、学びに向かう姿勢の向上」の項目、また、これを下支える「学校生活での規律・規範意識の向上」に力点を置き、学力向上を目指す。武内小スタンダードの見直しや個々の教職員の授業づくりの共有化など教職員が一体となって学力を積み上げていく体制づくりをする。 ・来年度、特別支援学級(知的)が新設され、入級児童も増えることから、特別支援に関する教職員の専門性と意識を向上させるために、研修や特別支援学級の校内授業参観などを行っていく。通常学級に在籍している困り感のある児童に対応するために、板書や話し合いをさせるための発問(問い)等ユニバーサルデザインに関わる研修を深めていく。